

---

# 神竜を守りし者

季仔@

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神竜を守りし者

### 【Nコード】

N6836V

### 【作者名】

季仔@

### 【あらすじ】

白い髪に黒と赤の左右で違う瞳を持つ少女。顔の下には刺青のよ  
うな模様があり周りの人々からは化け物呼ばわりされていた。  
しかし、その少女の正体は“選ばれし神竜の守護者”だった――。

## 彼女の過ごす日々

「化け物っ！」

いつしか僕はそう呼ばれるようになった。白い髪に黒と赤の左右で色の違う目。そして一番目立つ、左目の下にある刺青のような模様。気味悪がって誰も近づこうとしなかった。両親もおらず、児童養護施設で育った僕は格好の獲物だったと思う。

毎日の学校でのいじめ。助けてくれる人もいない。先生ですら気味悪がって助けようとはしなかった。ずっと一人の孤独な人生。そして、常を感じる「無」の感情。何かはわからないが心の片隅が空っぽなのだ。なにをやっても満足できず、まるで穴の空いた器に水をどんなに注いでも水は満たされない、そういった感じだった。

そんな暮らしを生まれてからずっとしてきた僕に初めての友達ができた。時は数日前にさかのぼる――…。

## 彼女の過ごす日々（後書き）

閲覧ありがとうございます！！

物語を書くのは好きなんです、文法がどうも苦手です…。  
間違いがあってもスルーをお願いします。

まだ名前は出てませんがこの物語の主人公、自分の事を僕と言っています、が女の子です！  
なにとぞご理解お願いします。

## 初めての友達

「やめて、離してよ!!」

少女の声が階段に響く。3人組の男子がその少女を取り囲む。

「なんだよ化け物！前みたいに暴れてみるよ、炎を出せよ！」

一番背の高いリーダー的存在の彼は言う。

「だから、炎って何のこと!？」

「とぼけんじゃねえよ！お前のせいで一回、施設が火事になっただろ！」

「痛いっ」

少女を掴む手に力が入る。

「本当に僕、なにも…なにも知らないんだ…。」

その火事の事ははつきりと覚えている。僕の前にいる三人も同じ施設で育ったのだ。火事が起こった日、その日も僕はいじめられていた。髪を引っ張られたり殴られたりした。そして突然、意識がフツと途絶えた。再び目を覚ますと目の前には、炎に包まれる施設があった。

「何度も言っているでしょ!? 君たちに殴られて意識が飛んで、目が覚めたら火事になっていた。」

「俺は見たんだよ！お前の手から炎が出るのを！」バシッ！

バランスを崩し、少女は階段から転げ落ちた。

「…っ!!」

肩と足に激痛が走る。意識がどんどん遠のいていく。少女は意識を失う瞬間、無意識にこう呟いた。

「タクト…。」

目を覚ますと見慣れない天井が目に入る。

「あ、目覚めました？」

聞きなれない少女の声。

「あの…ここは…？」

「病院だよ。今、先生呼んでくるからちょっと待っててね。」

そう言い残してタタタと去って行った。病院？自分の体を確かめる。白い包帯が体中あちこちに巻かれている。そっか、階段から突き落とされたんだっけ。おとなしく待っていると、さきほどの女の子が帰ってきた。後ろには医師らしい白衣を着た若い女の人。その女性  
は僕に

「ヒアードルディアさんですね？事情は学校の先生から聞きました。治るまで入院してください」とだけ言い、そそくさと部屋を出て行った。そのときヒアは聞き逃さなかった。医師が「呪われた子…」と呟いたのを…。医師の背中を睨んでいると明るい声が聞こえてきた。

「さつき先生がヒアードルディアさんって言っていたけど貴方、外国の人なの？」

僕は驚くしかなかった。そしてゆっくりと口を開いた。

「外国人かは…わからない。両親いないから。…それより僕の見た目、気味が悪くないのか？」

「ごめんなさい、不謹慎で…。でも貴方は素敵だわ！私、天川桜。ヒアって英語で聴くって意味よね。ねえ、ヒアちゃんの事、菊ちゃんって呼んでもいいかしら？」

「そんな風に呼んでもらえるなんて嬉しい…。でも…僕は化け物扱いされてる。そんな僕と一緒に居たら、友達が会いに来れないよ。」  
「明るかったはずの桜の顔が急に曇る。」

「私に友達なんていないわ…。ずっと入退院の繰り返し。そんな人と友達になろうと思う人なんかいるわけ…。ゴホッゴホッ。」

「桜、大丈夫！？」

急にせき込み始めた桜を心配して僕はナースコールを押した。一分もたたないうちに道具を持った医師が現れ、治療を始め発作はおさまった。

「いつもはこんなことないのに…その化け物のせいよ！桜ちゃん。」

やっぱり個室に戻しましょう?」

「菊ちゃんを化け物なんて呼ばないで! 私に初めてできた友達なんだから!」

「桜: 僕のせいで具合が悪くなるんだったら個室にしよう?」

「そうよ。ば: ヒアちゃんの言うとおりだわ。」

「いやなの! それに菊ちゃんのせいじゃない! 私は菊ちゃんと同じ部屋がいいの!」

桜の顔は真剣だった。その真剣さに医師は負け

「そんなに言うなら、このままでいいわ。ただし、これ以上具合が悪くなるようなら個室にしますからね。」と言いヒアをキツと睨んで部屋を出て行った。部屋に沈黙が走る。

「: ごめん。」

なんとか声を振り絞って言った。

「うつん。」

桜は首を横に振る。

「菊ちゃんは何も悪くない。ただこの世界の空気が悪いだけ。」  
世界? ずいぶん大それた言い方をするものだ。

「疲れちゃったから私、今日は寝るね。お休み。」

気がつけば夜になっていた。

「: お休み。」とだけ言い、僕もベッドに横になった。

怪我をした体は無理をしていたのか疲れがどっと押し寄せる。そのままヒアは眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6836v/>

---

神竜を守りし者

2011年10月9日12時02分発行